

氏名	福澤真希
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	甲第54号
学位授与の日付	2013年9月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項 該当
学位論文題目	『今昔物語集』天竺部の研究
学位審査委員	主査 教授 山上義実 副査 教授 高橋博巳 副査 教授 横田和憲

## 論文内容の要旨

本論では、平安時代に成立したと考えられている説話集、『今昔物語集』全三十一巻のうち、巻一～五までの、所謂天竺部について、各巻の構成と、天竺部にのみ見られる誓願と阿羅漢という仏教的要素を研究し、撰者が天竺部を編集することによって何を表現しようとしたのか、そして撰者が仏教をどのように認識していたのかを考察し、明らかにしようとしたものである。天竺部のみを対象としたのは、天竺部を構成する全ての巻が現存している(震旦部は一卷、本朝部は二巻を欠く)より撰者の編集方針を理解しやすいと考えたからである。もう一つには天竺部は本朝部・震旦部とはあまりにかけ離れた、興味深い世界観を持っているが、多くは仏典に由来する天竺を舞台にした仏教説話を撰者がどのように理解し、『今昔物語集』独特の天竺世界をどのように作り上げたのかを明らかにしたいと思ったからである。

天竺部の「天竺」とは古代インドを表し、巻一は仏教の創始者である釈迦の誕生から始まり、仏になった釈迦の救済活動を描いている。巻二は釈迦による信者への教育活動を描き、巻三では釈迦の育てた弟子たちの成長と、釈迦の死が描かれる。巻四は釈迦の死の直後から千年後までの天竺仏教の変化を描き、巻五は釈迦が生まれる前の天竺世界の在り様を描いている。本論の構成について以下に述べる。

「はじめに」では『今昔物語集』の概略と本論における目的について述べた。

第一章では天竺部に見られる特徴的な仏教的要素を取り上げ、撰者の考える仏教の実態について考察した。

第一節では誓願という、「自らの願望に関する思いと、他者に向けて言ったことを実現することを可能にするための方法を取り上げ、誓願が持つ特徴と、撰者の誓願に対する認識を考察した。第二節では阿羅漢という、仏には及ばないけれども悟りを開いた人々について取り上げ、仏教はどのようになることを求める教えであるのか、悟りを開くとどのようなことができるのかということ考察した。

第二章では天竺部の各巻の構成を詳しく調査し、撰者のどのような意図のもとに編集されたのかを考察した。

第一節では巻一の構成について調べた。巻一は四つの説話群から構成される。釈迦の救済活動を描くことによって、仏が人々を救うことに一生懸命な存在であるということを示していると考えられる。

第二節では巻二の構成について調べた。巻二は三つの説話群から構成される。善因善果・悪因悪果という因果応報の実態を釈迦が人々に教える様子を描くことによって、仏は人々を教育する存在でもあるということを示している。また教えの中で要求される善行のレベルが低く設定されている、悪行を為しても善行や懺悔をすることで取り返しがつくことを教えるなど、善行の実践についてのきめ細かい配慮が見られた。撰者は読み手が善行を実践することによって救いに与ってほしいと強く望んだようである。

第三節では巻三の構成について調べた。巻三は四つの説話群から構成される。釈迦の死を目前とした時代が、釈迦の弟子たちが救済者として成長し活躍した時代であり、一方で悪人が増加したが絶望することなく釈迦の死を乗り越えられたということが表現されていると考えられる。

第四節では巻四の構成について調べた。巻四は二つの説話群から構成される。釈迦の死後、百年後、四百年後、九百年後と、時代の流れに沿って説話が配置され、最後には人々が修行しても悟りを開くことができないという時代に突入する。仏の死後は仏弟子が人々を救う力が衰え、かつて救済者であった仏弟子は三宝（仏・法・僧）の一つとしての、形だけで救済の実力を持たない存在へと変化し、代わりに法華経、観音や阿弥陀などの救済者への信仰によって人々が救われる様子が描かれた。

第五節では巻五の構成について調べた。巻五は四つの説話群から構成される。天竺に仏がおらず、仏法が浸透していない時代から、釈迦の前世が仏になるための努力を始め、仏法が浸透していくことによって、仏が世に出るための環境が整っていく様を描いている。

第六節では巻一から巻五までの構成を通して、天竺部で表現されていることと天竺部の各巻の構成の特徴を挙げ、全体のまとめとした。天竺部全体としては「仏は何者か」と言うテーマと「仏教が世界にどのような変化を与えるのか」と言うテーマの二つを表現したものであると考えられた。

「おわりに」では第一章から第二章までの考察をもとに、撰者の編集方針と『今昔物語集』における天竺部の意味について考えを述べ、本論の締め括りとした。『今昔物語集』全体から見れば、天竺部は『今昔物語集』を読むための基礎的な知識を読み手に提供するために編集された巻であると思われる。

## 審査結果の要旨

一千話以上の様々な説話の集積よりなる『今昔物語集』は、江戸時代以来の長く膨大な研究の積み重ねがあるにもかかわらず、個々の説話がなぜその箇所に配置され、説話どうしがどう関連し、巻全体として、ひいては作品全体として何を表現しようとしたものであるかといった点について必ずしも明確にされているとは言えない。本論は、『今昔物語集』の巻一から巻五の天竺部を対象に個々の説話を丹念に読み取り、なぜその説話を選ばれてそこに置かれ、その説話を通して『今昔物語集』の撰者は何を語ろうとしたものであるかを、全説話に関して考察したものである。考察の対象を天竺部に限定した理由について、筆者は、震旦部、本朝部と比較して全巻揃っており欠話・欠文が極めて少なく、三部の中で最も完成に近い状態にあるためとする。

本論は二つの章よりなり、第一章は「天竺部に見られる方法と存在—誓願と阿羅漢について」として天竺部に特徴的な「誓願」と「阿羅漢」を取り上げ、その実態を詳細に追及することによって天竺部仏教のあり方を見つめようとしたものであり、第二章は「天竺部の構成について」として巻一から巻五の天竺部各巻の構成と主題、撰者の説話選択と配列の意図を探ろうとしたものである。本論の中心は第二章「天竺部の構成について」にあるが、各説話の配列意図、説話間の有機的な関連を、個々の説話の具体的な内容に即して考えていこうとすればするほど、天竺部仏教の実態、仏教の目的・方法、最高の存在である仏の思いが何であったかを明らかにすることになっていったようであり、そこで天竺部仏教のあり方を明らかにする「誓願」と「阿羅漢」に関する考察を、本論の導入部として最初に置いたものようである。

本論の中心をなす天竺部各巻の構成と主題に関する筆者の見解を簡単に紹介する。巻一の構成に関し筆者は、仏教の草創期すなわち教団の成立と仏法流布の過程を表現するために巻一の説話が収集されたという従来の解釈に対し、よりきめ細かく各説話を見ていくことにより、巻一の構成は撰者の抱く釈迦へのイメージを語ることにあると言う。釈迦の伝記を語るためにというよりも、釈迦がどのような存在であったかを表現するために各説話が収集・配置されたのであると言う。釈迦は、人々を救うことに一生懸命な救済者であり、一切衆生を救うという強い意志を持ち、誰一人差別することなく余すことなく人々を救おうとする姿が、それぞれの説話の内容と配列から読み取ることができると言う。

巻二については、これまでの「<法>賞賛の巻」とか「仏の教化の巻」という解釈はおおまかに過ぎるとして異を唱え、巻二の第二話に釈迦涅槃の予告の記事があることに注目し、やがて訪れる釈迦のいない世界で人々がどう生きるべきかということ教えるのが巻二の主題であると言う。「撰者は巻二を構成するにあたって、釈迦のいなくなった時代に、人々がいかに善業を作って、その上でいかにして悪果を逃れるべきであるかということ教えようと考えた」のであり、「巻の中の大説話群を成している善因善果譚と悪因悪果譚は、単に善業悪業の種類を並べるのではなく、その本質を伝え、救われるための効果的な方法

について指し示そう」としたものであると言う。

ついで巻三については、池上洵一氏や黒部通善氏等の先行論文の説におおむね賛意を表しつつも、第七話から第十話に亘って見られる竜や金翅鳥という想像上の動物が主人公として登場する話を配置した意図への言及がない点、及び撰者が巻三をどのような巻として表現しようとしたかへの説明のない点に不満を示し、「巻三が巻一、巻二を前提として成り立っていることを考えると、これまでの釈迦の救済活動と教育によって信者に優秀な人物が現れ、また弟子たちが釈迦の次を担う救済者として成長し、釈迦の死が目前に迫ってくると、仏弟子たちが本格的な救済活動に取り組むようになったことを表現する説話群である」と言う。竜や金翅鳥が登場する説話も、竜や金翅鳥が中心なのではなく、異類のような恐るべき存在からも尊敬され救いを与える仏弟子の姿を伝えることによって、釈迦の教育した仏弟子たちが救済者として成長したことを示すためであり、巻三は釈迦の死が訪れる時代である一方で、釈迦の教育した仏弟子たちが救済者として立派に成長した時代であることを描いたものであると解釈する。釈迦仏の役割は、巻一に描かれた救済、巻二に描かれた信者への教育とともに、仏弟子たちを救済者にするための教育があり、巻三に仏弟子たちの救済者としての活躍を描くことにより、『今昔物語集』の撰者は釈迦仏は自分の役割を完全に全うしたということ传达了かったのであろうと言う。

巻四については、釈迦がいなくなった天竺世界の推移がおよそ千年に亘って描かれていることから、「釈迦涅槃後の天竺仏法史」を描いたものであるという点では諸説一致しているが、その歴史の捉え方は様々であるとして代表的な先行論文三つの説を紹介し、そのいずれとも違った自説を展開する。「巻四は釈迦亡き後の天竺の仏法の事情が必然的に変化したこと、もっとはつきり言えば、仏弟子が救済者から三宝の一つであり、善い行いの対象として必要ではあるが、救済の実力が十分でない存在へと変化したことを表現しているのではないか」と言い、「撰者は天竺の優秀な仏弟子たちと現代（当時）の仏弟子たちとの間に大きな差があることについて、自分なりに説明をつけようとしたのではないかと考えられる。」と言う。巻の後半には「法華経」という経典、釈迦仏や観音菩薩、阿弥陀仏、薬師仏、弥勒菩薩などの仏像の霊験譚があり、劣化した仏弟子に代わり経典や仏像が人々の信仰の対象になり救済する存在になっていく様が描き出されているとも言う。

巻五は、「天竺付仏前」という編目を持ち、釈迦出生以前の天竺を舞台にした説話が収載され、中には仏教色の見られない説話や動物のみが登場する説話も見られ、これまで以上に編纂意図の分かりにくい巻であり、「仏教教訓の巻」「世俗説話の巻」「王法の巻」と様々に説明されているがまだ意見の一致は見えないと言う。筆者は、釈迦誕生以前の天竺の社会のあり様を示す諸説話、動物以上に愚かな人間の姿を描く動物説話、全ての衆生を救いたいという強い希望を持ち仏法を求めて様々な苦難に耐える釈迦の前生譚等々各説話を一つ一つ検討し、巻五は仏教が天竺に、つまりは人の世に生まれた必然性を語ろうとしたものであると解釈する。

本論の評価すべき点は、『今昔物語集』天竺部の全説話、185話を一つもないがしろにせず総てに亘って、なぜその説話を選ばれてそこに置かれその説話を通して撰者は何を語ろうとしたものであるかを丹念に考え続けていった点にある。様々な説話が次々に展開する『今昔物語集』は、一つ一つの説話の意味はもとより説話相互間の繋がりを考えることは必ずしも容易ではない。これまでの巻々の構成に関する論説も、大方は印象的・特徴的な特質に注目し、それに関わらない説話には言及しないまま立論しており、論者の視点によって様々に見解を異にするものであることは、本論の各巻に関する先行論文の紹介を見ても明らかであろう。そうした中で、全説話を具体的な内容に即してよく読み取り、解釈し、文面にはない撰者の意図を追求していった粘り強い作業は、高く評価し得る。右に紹介した各巻の構成・内容に関する解釈は、そうした作業から導き出された筆者独自のものであり、多少洗練されない素朴な論述であるとはしても、『今昔物語集』天竺部の大事な一面を照射した一つの研究成果であると言えよう。分量も、二十万七千余字、四百字詰め原稿用紙五百枚を超える大変な力作である。

もとより本論は、いろいろな欠点がないわけではない。筆者の目は天竺部のみに注がれており、『今昔物語集』全体からの考察が希薄な点が第一の欠点である。研究の段階として、まず天竺部から始め天竺部に限ってまとめることは決して間違いであるとは言えないが、博士論文である以上作品全体への目配りも持ってほしい所である。特に、天竺部は巻一から巻五の五巻のみであり、『今昔物語集』の中心は巻十一から巻三十一の二十一巻に亘る本朝部にあることは明らかであろう。撰者の最大の興味・関心も、目の前の現実、つまり本朝の世の中と人々にあったものと思われる。作品全体へのより深い知識と教養を持ち、自分なりの読みの見通しを持って作業を進めていたならば、本論はより意義深い、深みのある論述になったであろうと思われ、その点が惜しまれる。

また、細部の具体性に拘泥するあまり全体の論理性が希薄であるという欠点は、第一章と第二章の繋がりに関しても言える。第一章の「誓願」や「阿羅漢」についての調査・考察は、関連する全説話をよく読みこなし、これ以上ない具体的詳細なものであるが、どういう意味で第二章と繋がっていくのか分かりにくい。天竺部仏教のあり方を見るという意味で、底の部分で共通性のあることを感じられはするが、もう少し筆者の論理的な説明がほしい所である。

本論は研究の大成を示す完璧な学術論文というわけではないが、『今昔物語集』天竺部についての一つの独自の解釈を提起する学術論文であることは確かであり、以後『今昔物語集』研究の大成に向けて邁進していく礎の論文たりえるものと判断し、作品読解力、調査・分析力、文章表現力等々、筆者の中に研究者としての十分な資質を認め、当審査委員会は本論を課程博士の学位論文として「合格」と判定するものである。